

ハルハ河畔の攻防

——第二次ノモンハン事件——

秦 郁 彦

第二十三師団長小松原道太郎中将が書き残した丹念な日記（防衛研究所蔵）はノモンハン戦の研究に欠かせない第一級の記録だが、事件発生の前日に当る一九三九年（昭和一四年）五月十日の項に「東京物資漸く欠乏」のみだしで、9項目の具体例を列挙している。

1. 日記には年間を通じてこの種の話題は見当たらないので、やや奇異の感をぬぐえないが数例を拾ってみると、市中に金屑の一片もなし。ハイラルには鉄屑、古釘、古針金の散乱遺棄せるもの多し。
2. 織（物）欠乏。一着分百十円、ハルピンは三、四十円
3. 足袋、タオル、繻帯、殆んどスフ（人造繊維）、当地は尚木綿の残物あり。

4. 罐詰の罐、殆んど姿を没す。

5. 紙不足、店は商品を紙で包まず。

など悲観的な材料ばかりである。

情報の出所は不明だが、実際の統計データを参照すると意外に正確であることがわかる。たとえば日中全面戦争に突入した一九三七年に比べ、三九年における内地民需品の総供給量は綿布で六割、毛織物、紙は三分の一、ゴム製品は半分以下になっている。

主食のコメも在庫量が半分に落ち、四一年から配給制へ移行した。物価上昇（年率10%前後）もあって、実質国民所得は三八年から下降線に入っていた。^①百万人を超える外征の大軍を賄うためか、国民生活はかなりの圧迫を受けている。中国軍を相手にした前近代的戦争の三年目にして、日本の総合国力は息切れし始めていたと言えよう。

陸大卒の知性派と目され、大使館付武官補佐官、同武官など情報将校として革命前後のソ連に勤務した小松原が、戦時経済の実情に関心を寄せていてもふしぎはない。そうだとすれば、対ソ戦のリスクをはらむノモンハンの国境紛争にもう少し慎重な姿勢で臨んでもよさそうなものだが、逆方向に近い心境を思わせる反応が目につく。

東京の物資欠亡ぶりを憂えた翌日（五月十一日）——くしくも、事件の発端となった日——の日記には「支那軍に對する必勝の信念」と題し、

三倍なれば殲滅し得べし

五倍なれば相当大なる打撃を与え得べし

十倍なれば攻撃し得べし

のような勇ましい所見が登場してくるのである。小松原には支那軍と戦った経験はないから、誰かからの受け売りだろうが、十倍の敵と戦うのも辞さないというのは、およそ兵学の常識に反する暴論である。だが支那軍の戦力を極端に軽侮する風潮が当時の陸軍部内に横行していたのは、まぎれもない事実だった。自前の空軍も戦車も持たぬ劣等装備で、後退戦略を重ねる支那軍に対する連勝体験の副産物ともいえよう。

そして満州事変の成功を背景に、「泣く子も黙る関東軍」の威勢を誇る「独立王国」を形成していた関東軍のなかには、「支那軍」を「外蒙軍」や「ソ蒙軍」に置きかえた「必勝の信念」が広がっていたようだ。

第一次ノモンハン事件では第二十三師団、第二次以降は関東軍司令部が主導した作戦計画を見ると、兵力差を計算したとは思えない独善的な思考と運用が目につく。第一次で小松原が手元の兵力を出し惜しんで、東捜索隊の全滅を招いたのは、既述の通りだが、戦訓は生かされなかった。

七月初頭のハルハ河渡河作戦を立案した関東軍の作戦参謀たちは、対決するソ蒙軍兵力を歩兵九大隊、戦車一五〇両と算定したうえで、歩兵十二大隊、戦車約七〇両という「関東軍としては未曾有なる大規模の地上作戦」^②を発動すれば「牛刀をもって鶏を割くようなもの」と楽観していた。この渡河作戦は失敗し、一日で東岸へ撤退せざるをえず、虎の子の安岡戦車団も甚大な損害を受け、戦線は膠着状況に陥った。

満を持したジュエーコフの第一集団軍が八月二十日に歩兵四個師団、戦車・装甲車五個旅団の兵力を投入した大包囲作戦に出た時も、関東軍と第六軍は消耗して戦力が半減した第二十三師団だけで支えられると誤算した。

そればかりか一個旅団強を加えただけで、八月二十四日から無謀な反転攻勢を試みている。もしソ蒙軍がかねてか

ら主張していた国境線で自発的に停止していなかったら、第六軍は玉碎同然の破局に陥ったかもしれない。

ここまでくると、関東軍には戦術上の計算どころか、傷つけられたブライドへのこだわりしか残らなかった。全軍をあげての対ソ決戦を決意した植田関東軍司令官は、「暴戻不遜なる蘇蒙軍を撃滅し以て皇軍の威武を中外に宣揚せん」⁽³⁾(九月二日の訓示電)と、なおも強気だったが、さすがに見込薄と判断した大本営の介入で中止となり、四か月にわたったノモンハン戦は終結した。

軍事的観点からは日本軍の敗北は隠しようもないが、関東軍をひきずった主戦派の辻政信参謀は、戦後に刊行した著書『ノモンハン』で所々に反省の弁を加えながらも、「戦争は敗けたと感じたものが、敗けたのである」⁽⁴⁾としめくくつた。責任を取らされる形で一時左遷された服部卓四郎、辻のコンビは、二年後に大本営の作戦課長、兵站班長(ついで作戦班長)として返り咲き、似た発想と手法で対米英戦へ全軍をひきずっていくことになる。

少し進みすぎたので、あらためて第一次ノモンハン事件が終った一九三九年五月末まで戻りたい。

「委せたらいいではないか」

小松原師団長が山県支隊へハイラルへの撤退命令をくだし、関東軍司令官と参謀次長から健闘ぶりを評価する「祝電」が舞いこんだ五月三十一日には、事件のその後の展開を暗示する次のような関連情報が記録されている。

1. ソ連のモロトフ新外相は最高会議の決定に基づき東郷茂徳駐ソ大使へ、全力をあげてモンゴル国境を守るつもりだと表明した。

2. 事件が全面戦争に拡大する可能性は「万無きものと信ずる」が、もしソ蒙軍が攻勢をかけてきても、第二十三師

団だけで対処できるとする関東軍の見通しが中央部へ打電された。⁽⁵⁾

3. 大本営作戦課は、関東軍の不拡大方針に信頼し早期終結を期待する。そのためハイラルを爆撃されても、航空隊の越境進攻は実施しないという主旨の「ヘノモンハン」国境事件処理要綱⁽⁶⁾を作成している（ただし関東軍には示達されず）。

4. 陸軍の主唱で年初から進行していた防共協定を軍事同盟へ強化しようとする日本とドイツの外交交渉の過程で、対米英刺激を警戒して強硬に反対する海軍に右翼からの圧力が強まった。テロに会う覚悟をきめた山本五十六海軍次官は、この日の日付で「述志」と題した遺書を書き、金庫に収めている。

5. 四月に天津のイギリス租界で起きた親日派中国要人の殺害犯引き渡し問題で、日英関係は緊張を高めつつあったが、この日天津の日本総領事から英総領事へ期限付要求が提出された（六月十四日には北支那方面軍による天津租界の封鎖へ発展）。

いずれも九月に勃発する第二次世界大戦へ向かう巨大な潮流が残した指標であったが、渦中にあつた当事者たちの視界は限られている。当面の課題と取り組むのに追われ、右往左往するしかなかった。

国家的観点から言えば、この段階での最優先課題は半年余の間に七十数回の五相会議でもみにもんで決着がつかなかった4の三国軍事同盟問題だったろう。ドイツと結んで筆頭仮想敵国のソ連を東西から挟撃できるから、陸軍が実現に熱意を持ってもふしぎはない。

ところが五月頃から、日本が同盟に応じないならドイツは馬を乗りかえてソ連と手を結ぶかもしれないという情報

が流れてくるようになった。実際に英仏との提携に見切りをつけたソ連は八月二十三日、ポーランドの分割を密約したうえで独ソ不可侵条約を結び、呆然自失の平沼内閣は五日後に「欧州の天地は複雑怪奇」の一言を残し、倉皇として総辞職する。

こうして短期間に変転を重ねた日独ソ関係のバランスを、スターリンはノモンハン事件の処理策に反映させたが、同盟問題で多忙な陸軍中央は、ソ連に事件拡大の意図がなさそうだと判断していたこともあり、暴走気味の関東軍にひきずられるまま半ば放任していた。

もっとも国軍の七割以上を中国大陸の戦場に釘づけされていた陸軍にとつての最重要課題は、日中戦争の早期解決であり、政治・外交的手段による和平工作も模索しているところだった。その意味でも中国に影響力の強いイギリスとの関係を、天津租界問題で悪化させず、日本に有利な形で調整する必要があった。

この頃の畑俊六侍従武官長日誌を見ると、昭和天皇の関心が圧倒的に同盟問題と天津問題に集中していたことが窺える。ひとつには米英協調を重視する天皇が三国同盟を嫌い、天津での実力行使を抑えたいと希望していたのに、それに逆らう姿勢をとっていた陸軍とのやりとりがくり返されたせいでもある。

五月末に一段落した第一次ノモンハン事件について、陸軍は侍従武官長を通じ一応の情報は上げていたようだが、天皇が始めて関心を示した記録は、六月二十二日の畑日誌に「昨日御前に召され……昨今のノモンハンの外蒙軍の活躍は天津租界問題と関係ある如く思われるゝが」とあるのが最初である。

そこで畑は夕方に板垣陸相を訪れて懇談したが、「ノモンハン事件の原因は未だ参謀本部にて適確なる判断なきも、大したことになるやに察せられる」と聞いている。

おそらく天皇にも伝えられたであろうが、すでに二十一日には関東軍から第二十三師団に安岡戦車団を加え、ハルハ河を越えて進入したソ蒙軍を膺懲すると通報され、陸軍省・参謀本部首脳の会同で論争になっていた。

陸軍省側からはかなり強い反対意見も出たが、「一師団ぐらいいちいちやかましく言わないで、現地に委せたらいいではないか」という板垣の一言で容認してしまう。容認派の稲田作戦課長は、戦後に「結果論にみると、初めから中止を命ずべきであったという感じもあるが、関東軍はかなり忠実に中央の意向に同調しているように見受けられた」ので、あえて認めたものの「事後承諾を求めてきたそのやり方に……胸中一まつの不安を押さえることができなかった」と回顧する。

この時点で、関東軍はすでにハルハ河を渡河して、地上部隊をモンゴル領内に進攻させるとともに、ソ連空軍の根拠地であるタムスクへ航空の全力をあげて攻撃する構想を固め、参加部隊に出動準備を下令していた。しかし「若し中央に企図を報告する場合、中央より行動すべからざる旨申し来らば」⁽⁸⁾困るので、越境攻撃の部分は秘匿し事前協議はしないと決めた。

板垣も稲田も、「膺懲」行動がハルハ河を越えたモンゴル領内に及ぶとは想像できなかったのか、頼まれもしないのに、内地から野戦重砲二個連隊を増派する配慮を見せている。

この増派は二十四日閑院宮参謀総長が参内して上奏、裁可を得た。ついでに膺懲行動の概要も報告し、ソ連軍が補給根拠地のザバイカル軍管区から八〇〇kmも離れたノモンハンに大兵を注入することは「万なかるべし」と樂觀論を言い添えたが、天皇は双方がいたちごっこで増兵すると拡大の恐れがあり、「満州事変の時も陸軍は事変不拡大といながら彼の如き大事件となりたり」と述べ、むしろ国境画定交渉に入ったらどうかと提言した。

昭和天皇の目配りと心配は的を射ていた。許可を得ない越境攻撃は、天皇の統帥大権を犯す重大な犯罪である。天皇は満州事変時に林朝鮮軍司令官が独断越境を強行したにもかかわらず、「越境將軍」ともてはやされ陸相、ついで首相の座を得た先例を想起したのかもしれない。

偶然ながら、同じ日に上京してきた関東軍参謀の片倉衷中佐からタムスク爆撃の企図を知った参謀本部は、次長名で関東軍参謀長へ自発的中止を促したが、関東軍の暴走は止まらない。タムスク爆撃は二十七日に決行され、得々と大戦果を電話で報告した寺田高級参謀に、稲田作戦課長が「馬鹿ッ、戦果が何だ」とどなりつけ「余りと言えは無礼の一言」は「関東軍と中央部とを、決定的に対立させる導火線になった」と辻参謀は記す。

さすがに地上部隊も越境しそうだと思念したのか、大本営は二十九日に上奏裁可を得た大陸命第三二〇号と大陸指四九一号で「地上戦闘行動は概ね、ポイル湖以東……に限定するに勉むるものとす」「敵根拠地に対する空中攻撃は行わざるものとす」と関東軍を抑えにかかった。「勅命」という伝家の宝刀を抜いたかに見えるが、それにしても、腰が引けていた。

南東から北西方へ流れるハルハ河が西へ向きを変えポイル湖へ流れこむ地形なので、「ポイル湖以東」にはモンゴル領も入ってしまう。係争地域は「ハルハ河以東」と表現すれば足りるのに、なぜわかりにくい「ポイル湖以東」としたのか理解し兼ねる。しかも「概ね」という曖昧な条件が加わり、「勉むる」の部分で強制的色彩がぐつと薄まって、単なる努力目標としか読めなくもない。

さらに大陸指を補足する次長電(六二七号)でも、「近く貴軍の企図せらるる地上作戦を容易ならしむる趣旨のものなり」と、言わでもの配慮を示していた。七月二日の発動を期しすでに地上部隊を攻撃配置へ前進させつつあった

関東軍が、一連の警告を歯牙にもかけなかったのは当然の反応だったと言えようか。

「再び起て打撃を……」

ここで目を転じて、第二次ノモンハン事件の攻勢作戦を發動した関東軍の動きを追ってみよう。

すでに見てきたように、関東軍はノモンハン周辺の国境紛争（第一次ノモンハン事件）は一段落したものと判断し、対ソ戦において本来の主戦場と想定していた東部、北部正面の作戦準備へ関心を向けつつあった。

六月三日から七日まで司令部では東部満州を舞台とする図上演習を実施し、参謀本部からは橋本第一部長を筆頭に秩父宮中佐、島村、宮子、今岡各少佐ら作戦課のスタッフ七名も参加した。後方担当の今岡は到着早々に「ノモンハン事件は終りましたからもう大丈夫です。ご安心して下さい⁽¹²⁾」と辻参謀に言われたと回想している。

しかし、この甘言は額面どおりには受けとれない。ソ蒙軍の活発な動きを注視しながら、「再び起て打撃を与うる⁽¹³⁾」機会を窺っていたという服部の回想のほうが本音だったと思われるからだ。

実際に東搜索隊を撃破したあとハルハ河西岸に退去したソ蒙軍は、山県支隊のハイラル帰還を見きわめるや、六月二日には東岸の旧陣地へ復帰し、日本軍の再攻撃に備えた防衛体制の強化を進めつつあった。モスクワは、増援兵力を加えた前線部隊の再編成にも着手した。

ブリュッヘルが失脚したあと、極東方面軍は第一赤旗軍（ハバロフスク）と第二赤旗軍（ウラジオストク）に分割されていたが六月五日、チタに司令部を置く前線集団軍を新設し、シュテルンを集団軍司令官に任命する。前線集団軍は両赤旗軍、ザバイカル軍管区、第五十七軍団ばかりか海軍の太平洋艦隊まで指揮下に入れたから、旧極東方面軍

を上まわる大軍となった。

六月十九日には、国防人民委員会指令第二九号により第五十七軍団を第一集團軍に改編し、ジューコフが集團軍司令官に任命された。形式上はシュテルンの指揮下に属したとはいえ、ジューコフはウオロシロフを通じスターリンと直結して行動することが多く、シュテルンの司令部は主として補給など後方支援の役割を担うことになる。¹⁹ 事実上は二頭併立と言ってもよく、両人の関係がしつくりいかなかったとしてもふしぎはない。

六月中に第一集團軍が日本軍との決戦に向けタムスクを中心にモンゴル東部へ集中した兵力は、

第36車載狙撃師団（約一万一千人）

第11戦車旅団（戦車一八二両）

第7、第8、第9装甲旅団（装甲車二五四両）

モンゴル第6、第8騎兵師団（約二千人）

戦闘機一五一機、爆撃・偵察機一一六機など計三一八機

であった。

ジューコフが立ててモスクワに伝えた作戦構想は「日本の大規模攻勢を想定して、ハルハ河東岸の陣地を固守し、反撃態勢を準備したい」というもので、あわせて兵力の増派も要請したが、国防人民委員部は六月十二日に要請を上まわる狙撃三個師団、戦車二個旅団、装甲車三個旅団、砲兵四個旅団、飛行六個連隊を送ると返電してきた。¹⁹

とくに力を入れたのは、五月の空戦で「きわめて不首尾」（ジューコフ最終報告書）と自認する航空隊の建直しであった。しばらく出動を禁じ、スペイン内戦でソ連空軍を指揮したスムシュケビッチ少将（空軍副総司令官）が六月

上旬に連れてきた熟練飛行士の一団を、教官役として再訓練に当らせる。

戦闘機は旧式鈍速のイ15戦闘機に代えて武装を強化したイ16とイ153（チャイカ）戦闘機を補充し、日本の九七式戦闘機が得意とする格闘戦を避け、一撃離脱戦法を採用した。新鋭のSB—2高速爆撃機も加わり、地上部隊との直協を重視した。⁽¹⁶⁾

急ピッチで再編と再訓練を進めたジューコフが、禁を解いて航空隊に出撃を許したのは六月十七日、偵察を兼ねた地上部隊（モンゴル軍）の出動を下令したのは十九日だから、期せずして日ソ両軍は相手方の動きを手探りしつつ、ほぼ同時に二度目の遭遇戦へ踏み出したことになる。

小松原日記にはソ蒙側の動きを、

六月十七日……「敵27機、カンジュール廟を対地射撃」「戦車・装甲車34両を伴う敵騎兵三〇〇、ノモンハン付近の満軍派遣隊を攻撃す」

十八日……「敵15機、アルシャンを偵察」「敵40機ツアガン・オボ、ハルハ廟を空襲、敵戦車も出現」

十九日……「五時、敵17機、カンジュール廟とアムグロを爆撃、物資集積所の満軍用ガソリン四〇五罐など炎上し、一名戦死。歩兵団長の指揮する一個連隊をカンジュール廟に急派」

と記録している。

戦史叢書『関東軍(1)』は「小松原師団長は六月十九日朝、以上の状況を報告するとともに、これを撃攘すべき意見を具申した」「関東軍第一課においては……意見具申に接するや、直ちに研究に着手した」「軍は越境せるソ蒙軍を急襲殲滅し其の野望を徹底的に破砕する」方針を固めたと記述している。⁽¹⁷⁾

「判断に迷った」と称する事も、「第二十三師団長は、防衛の責任上進んで更に徹底的に膺懲したい、との意見を具申して来た」⁽¹⁸⁾と小松原が主導したことを強調し、他の諸文献も同調しているが疑問もある。

関連の重要電報を収録している関東軍の機密作戦日誌に、なぜか第二十三師団長の具申電が洩れているし、小松原日記にも言及がなく、十九日の項には「軍は外蒙軍の挑戦的行動を膺懲破摧せんとす」との「軍命令を受領す」としかなく、積極的姿勢を感じさせる表現が見当たらないからである。

また小松原の具申電への回答となるこの軍命令（関作命一五三〇号）は、十九日二二四〇の発信となっており、しかも関係諸部隊へ任務の付与を並べた十六項目にわたる長大な電文である。植田軍司令官の反対で棚上げされた第七師団を使用する当初案の作成過程（後述）まで考慮すると、時間的に不可能に近く、少くも数日前から関東軍司令部の主動で準備しておいたとしか考えられない。

それを裏書きするような証言もある。六月十七日、植田関東軍司令官は矢野参謀副長、寺田、服部、辻、芦川ら参謀をひきつれ、北部満州の防衛を担当する孫呉の第四軍司令部を視察中だった。後方担当の第三課（後方担当）参謀芦川春雄少佐の「備忘録」と題した日記に次のような記載がある。

六月十七日（土曜日）、ノモンハン方面の敵の跳梁に鑑み、第一課（作戦担当）において「第七師団の主力をアルシャン方面に進め、第二十三師団の一部をカンジュール廟、將軍廟方面に進め、航空部隊と共に敵を徹底的に撃滅する」の議起こるや、第三課においても所要の準備を進む。

この日記を発掘した『昭和史の天皇』取材班は、健在だった芦川から「作戦会議の席ではなく、十八日に新京へ帰るまで同行した辻参謀から作戦実施にさいしての兵站補給について相談されたのだ」と語っている。⁽¹⁹⁾

前後の経過から想像すると、攻勢計画の原案は六月十七日よりかなり前から辻が暖ため服部も同調していたもので、上部を説得できる材料がそろうのを待っていたのではあるまいか。

そして十七日以降に続発したソ蒙軍の「挑発的」行動を伝える小松原の通報が、好材料として利用されたのだろう。ただちに十九日午前、軍司令部の第一課作戦室に寺田大佐（高級参謀）、服部中佐（作戦主任）、三好康之中佐（航空主任）、村沢一雄（北部担当）、辻（東部担当）、島貫武治（西部担当）の三少佐らが集って協議した。作戦担当の矢野音三郎参謀副長は出張の帰りがおくれ、列席していなかった。

作戦会議の経過は、関東軍機密作戦日誌が詳しく伝えている。

タムスク爆撃は目くらまし？

それによると、寺田参謀は主旨には賛成するが、支那事変の処理に重要な対英関係が天津租界問題でこじれている最中なので、解決の見通しがつくまで攻勢時期を延ばしたらどうかという慎重論を唱えたいらしい。

それに猛然と食い下ったのが辻で、「事ここに及んで、ノモンハンを放置すればソ軍はわが軟弱態度に乗じ大規模な攻勢をかけてくるだろう。徹底撃破する自信もあり、それにより、かえって日英交渉を好転させられる」と説き、服部、三好が同調して寺田も主張をひっこめた。

のちになって寺田は「事件を自主的に打切るとせば此際が正に潮時なりし」⁽²⁰⁾「職を賭しても主張し抜くべきであつ

「た」⁽²¹⁾と悔い、辻自身も「素直に寺田参謀の意見を採用」していれば「第二次ノモンハン事件は……立ち消えになったかもしれない」⁽²²⁾と反省している。

ともあれ辻がまとめた「対外蒙作戦計画要綱」（案）の要点は、次の通りである。⁽²³⁾

作戦方針

「ノモンハン」方面に於ける越境「ソ」蒙軍を急襲殲滅し其の野望を徹底的に破摧す。

作戦指導要領

- (1) 飛行部隊は地上作戦の開始に先だち展開して、好機を捉え航空撃滅戦により制空権を獲得す。
- (2) 地上部隊主力（第七師団と戦車団）を鉄道でアルシャンに集中し、ハルハ河上流方面より左岸（西岸）に進出し、川又西方台上（ハマルダバ）の敵砲兵主力を撃滅して敵の退路を断ち、ついでノモンハン方面の越境した敵を背後より攻撃し撃滅する。
- (3) 第二十三師団は主力に先だち、勉めて多くの敵をノモンハン方面に牽制抑留する。
- (4) 戦闘が一段落した後には、一部兵力でハルハ河左岸の要点を確保する。

使用兵力

第七師団長の指揮する歩兵二個連隊（六個大隊）等

第二十三師団の歩兵一個連隊（三個大隊等）

第一戦車団（戦車第三、第四連隊）独立野砲兵第一連隊（九〇式野砲八門）

第二飛行集団の一部（戦闘二、重爆二戦隊など）

その他

この要綱案を提出された磯谷参謀長は、主旨に異存はないが師団を動かすほどの規模となるので、中央と連絡し、大本營の了解を得ることが必要だと述べ再考を求めた。しかし寺田、服部は中央の空気を察するに「意見具申を採用する公算少」と思われるので、独断専行すべきだと押す。磯谷はさらに矢野副長が帰ってくるまで待つたらどうかとも述べたが、両人は待つ余裕はないと強弁し、説得されてしまう。

ところが意外にも植田軍司令官が異論を持ち出す。攻勢をかけるのはよいが、ノモンハン地区の防衛は第二十三師団の管轄なのに、他の師団を以て解決するのは好ましくないというのだ。服部は第二十三師団が新設から一年にすぎず、三單位師団（三個歩兵連隊の編制）でもあって、在満師団では最精鋭と目されている第七師団（四單位編制）に比し戦力的に不安があると食いさがつた。

すると植田は、戦術的考察はその通りだが、「統帥の本旨ではない……自分が小松原だったら腹を切るよ」と言い切り、「肅然として答える者もなかった。正に一本参つた」⁽²⁴⁾形の幕僚たちは、引きさがつて案を練り直すことになる。もともと植田の本心について、三好参謀は「小松原師団長のメンツを表面にたてられたが、内心では第七師団をそんなところへ使うな」⁽²⁵⁾という意図ではなかったかと推測している。

しかし練り直すといっても、急に斬新な発想が湧くはずもない。軍司令官の顔を立てて、主役を第七師団から第二十三師団へ入れ替えてはいるが骨格は変わらず、むしろ投入兵力を歩兵九個大隊から十二個大隊へ、火炮も七六門から九〇数門へ水増ししていた。小松原が率いる第二十三師団の主力（満州里分遣の一大隊を除いた八個大隊）に第七師

団の四個大隊を編入するので、幕僚たちは名を捨て実を取ったともいえる。

早くも十九日夜には航空部隊の出動準備を指示した関東軍命令（関作命第一五三〇号）、翌二十日午後には地上部隊の応急派兵（編制定員の約八割）を命じた関作命第一五三二号が発出され参謀総長をふくむ関係方面に通報されているが、国境線を超えるタムスク爆撃とハルハ河渡河作戦の企図は明示していなかった。

それでも注意深く読むと、前者の第三項には「第二飛行集団長は……越境敵飛行機を索めて撃墜し且爾後の進攻戦を準備すべし 敵航空根拠地に対する攻撃実施に関しては別命す」「速に……ハンダガヤを経てハルハ河左岸地区に通ずる道路の写真撮影を実施すべし」とヒントめいた字句が入っていた。大本営の担当参謀なら何を意味するか察知できるはずだが何も手を打たず、二十七日のタムスク爆撃を知ってあわてふためいたことにされている。

戦史叢書はそうした事情から関作命は「直ちに、大本営へ送致されなかつたとしか思われぬ」と推測するが、別の見方もありうる。大本営には内心で関東軍に同調ないし遠慮する空気があり、あえて幕僚連絡等で問いただしめせず、黙認ないし放置していたとも考えられるのである。

ヒントは他にもあつた。地上部隊の行動を指示した関作命一五三二号は、既述のように二十一日の省部首脳会議で論議された。出席者は「第二十三師団長は……主力を将軍廟方面に集中しハルハ河畔に於ける爾後の作戦を準備」（第五項）とか「安岡支隊長は……第二十三師団主力と策応しノモンハン方面に於ける爾後の作戦を準備すべし」（第九項）とハルハ渡河戦を示唆していたのに、問いただしたようすは見られない。

国境を越えての軍事行動には大命が必要で、それを無断でやるのは天皇の統帥大権を犯すことになる。しかも地上侵攻は空爆よりも罪は格段に重い。ところがタムスク爆撃計画のほうが前述のような片倉参謀の暴露（二十四日）で

表 1 小松原兵団の編組

A 左岸攻撃隊

(1939年7月3日～5日)

ハルハ河畔の攻防(秦)

	指揮官	出動兵数	戦死	その他
歩71連隊 (I～Ⅲ大)	岡本 徳三大佐	2,404	47	
歩72連隊 (I・Ⅱ大)	酒井美喜雄大佐	1,705	73	
砲13連隊 (Ⅲ大)	関 武思少佐	448	7	野砲9門 (失1)
工23連隊 (1・2中)	斎藤 勇中佐	371		
歩26連隊 (I～Ⅲ大)	須見新一郎大佐	<u>1,500</u>	143	
捜索隊 (1・2中)	井置 栄一中佐	264	4	第2中は右岸
配属速射砲 (9個中隊)		<u>150</u>		計34門
その他				通信隊、衛生隊、 輜重、自動車、 高射砲隊の一部等
計		<u>7,500</u>	323	

B 安岡支隊 (右岸攻撃隊)

	指揮官	出動兵数	戦死	その他
戦車3連隊	吉丸 清武大佐	343	47	戦車25両 (失15)、 装甲車7 (失6)
戦車4連隊	玉田 美郎大佐	561	28	戦車42両 (失15)、 装甲車10両 (失1)
歩64連隊 (I～Ⅲ大)	山県 武光大佐	2,388		I大の死24、Ⅲ大 は予備
歩28連隊 (Ⅱ大)	梶川 富治少佐	<u>800</u>	28	
独立野砲1連隊	宮尾 幹大佐	539	8	野砲8門 (失1)
砲13連隊 (I・Ⅱ大)	伊勢 高秀大佐	<u>1,100</u>		野砲24門 (失1)、 I大は予備隊
工24連隊 (1・2中)	川村 質郎大佐	235	11	
配属速射砲 (3個中隊)				計12門 (失2)
満軍 (興安支隊)		<u>(1,700)</u>		ホルステン川南岸 を守備
計		<u>6,000</u>	127	
総計		<u>16,670</u>		

八九(八九)

出所：各部隊の戦闘詳報等により作成

(注1) 出動兵数の下線は推定

(注2) 別に第2飛行集団の出動兵数2,993名

(注3) 敵戦車・装甲車の撃破は歩71が164両、歩72が97、砲13が88、歩26が83、
捜索隊が7と記録されている。

大本営をあわてさせたため、地上部隊のハルハ河渡河への関心はかすんでしまった。目くらし効果と呼んでもよい。大本営は参謀次長名で関東軍参謀長にあて「外蒙内部の爆撃は適当ならず」と自発的中止を促す電報を打ち、翌日には作戦課の有末作戦班長が説得役として新京へ飛んだ。

関東軍のほうも、二十三日関東軍が第二飛行集団へ発したタムスク爆撃の命令書を島貫参謀に持参させた。しかし決行後となるように、わざわざ列車と連絡船を使い上京させる小細工を弄している。満州事変時に陰謀の「止め男」として派遣された建川少将の先例を見習ったのであろうか。

関東軍と大本営のドタバタ劇

その後に進展した一連のドタバタ劇を日録風に追ってみよう。²⁷⁾

六月二十三日―(a)タムスク爆撃を命じた関東軍司令官の命令(関作命甲第一号)を第二飛行集団に下達、(b)同日夜、命令写を携行した島貫参謀、列車で新京発上京。

二十四日―(a)「我の断乎たる決意」をソ連へ示すため、関東軍へ野戦重砲二個連隊を内地より増派することについて参謀総長より上奏、裁可を得る(二十六日発令)、(b)片倉参謀、岩畔軍事課長へタムスク爆撃の計画を暴露、(c)それは稲田作戦課長に伝わり、一六三〇に参謀次長名で、外蒙内部の爆撃を実施しないよう要望し有末中佐を連絡のため飛行機で派遣すると伝える電報を関東軍参謀長にあて発信。

二十五日―(a)第二十三師団長へ「一時ハルハ河左岸に行動することを得」との関東軍命令(関作命甲12号)を示達(参謀総長へも通報)、(b)爆撃中止を説得するため、有末次中佐を空路で新京へ派遣、(c)それを知った関東軍は

○七三〇に寺田参謀から第二飛行集団参謀長へ二十六日の爆撃決行を指示。

二十六日―(a)タムスク爆撃の予定を準備不足により一日延期、(b)島貫少佐、東京着。

二十七日―(a)戦爆計一一九機の大編隊でタムスク攻撃を実施、敵一四九機を撃墜破したと大本営へ報告、(b)天候不良でおくれた有末は新京着、(c)島貫が大本営へ出頭、(d)参謀次長より関東軍参謀長へ「事前連絡なかりしを甚だ遺憾」と発電(参電七九七号)。

二十八日―(a)参謀長↓参謀次長「北辺の此事は当軍に依頼し安心せられ度」の返電

二十九日―(a)参謀総長より上奏、裁可を得て大陸命三二〇号、大陸指四九一号を発令。

七月二日―(a)橋本第一部長、新京へ出張、大陸命の主旨を植田軍司令官へ説明(橋本は翌日戦場へ向い観戦)、(b)安岡支隊、夜襲により攻勢発起。

三日―(a)未明第二十三師団主力はハルハ河を渡河、ソ蒙軍と決戦。

この日録を眺めてまず気づくのは、強気の関東軍と硬軟の合い間をふらつく軍中央とのやりとりがチグハグにすれちがひ、結果的にタムスク爆撃もハルハ河渡河も抑止できなかったことだろう。

もし中央が本気で阻止するつもりなら、二十四日の時点で大陸命を発するのは可能だった。二十九日の大陸命でもハルハ河渡河は中止させられたはずだが、既述のように「概ねポイル湖以東に限定」とか「近く貴軍の企図せらるる地上作戦を容易ならしむる趣旨」のように曖昧な表現になっていたため、関東軍に見くびられてしまう。

疑心は疑心を呼ぶ。関東軍が作命の番号(一五〇〇番台)を二十三日から甲第一号という新連番号へ更改したのも、

秘匿のための小細工かと疑う向きさえあるが、いずれにせよ荒馬を乗りこなすとか、「駄々っ子」を宥めすかす中央の手法が通じる相手ではなかった。関東軍は「任務達成上の戦術的手段として、軍司令官の権限に属するもので、別に大命を仰ぐべき筋合ではない」と割り切っていた。中央からタムスク爆撃を叱られても(二十七日のd)、「現場の認識と手段とに於て貴部と聊か其の見解を異にしあるが如きも北辺の些事は当軍に」任せてくれと聞き直る。

それでは、これほどの無理を押し通して決行したタムスク攻撃はそれに見合うだけの成果を収めたのだろうか。翌日の新聞が「前代未聞の大空中戦 戦果絶大」(関東軍報道班長談)と報じたのはともかく、四年後に発行された陸軍大学の教科書「ノモンハン空中戦史」までが「世界航空史上未曾有の戦果」と自讃している。

たしかに午前中の第一波攻撃は、幸運もあつての奇襲となり、あわてて離陸しはじめた敵戦闘機群は九七戦の編隊に上方からかぶられ、次々に撃墜されるか、在地のまま撃破された。しかし爆撃隊のほうは投弾のタイミングを外したため命中弾はほとんどなく、奥地のサンベースに向つた午後第二波攻撃でも在地機が見当らず空振りに終つてしまふ。

発表された総合戦果は空中で98機、地上で49機、日本側の損失は4機(7人)だが、最近になつて判明してきたソ連側の記録によると、空戦で撃墜された戦闘機は17機(9人)にすぎない。詳細は不明だが他に地上で撃破されたり被弾した機がかなりあつた。搭乗員の戦死者数で見ると、大差はない。どうやらネディアルコフ(ブルガリア人の航空世家)による「日本側の勝利は不完全」という評言が妥当なところだろう。

参加者のなかからも疑問の声は出たようだ。下野一霍少将(第七飛行団長)は「当時から確認できる撃墜数は二十六機と判断していた」とクックス博士へ語り、空中指揮に當つた野口雄二郎大佐(戦闘機の飛行第11戦隊長)は、中

隊長たちと「(発表戦果は) どう考えても多すぎる」と言いあい、「戦果が誇張されるとすればそれで得をする者がいるからだ³²⁾」と想像をめぐらせた。

それが参謀クラスではただ一人爆撃機に同乗して戦果を見届け、その足で新京の司令部へ戻った辻少佐を指すと考へてもむりはない。もとをただせばタムスク爆撃の発想は、七月早々に予定したハルハ渡河作戦にさいし、戦場の制空権を確保したいという願望に発していたからである。

だがその思惑はかなわなかった。実際にはソ連側は直後に航空二個旅団をザバイカル軍管区から補充する処置をと、七月三日のバインツァガン戦(後述)には戦闘機一二〇機、爆撃機八〇機と、日本空軍を上まわる機数をそろえて迎えうったからである。

この頃になると、中央も関東軍を実質的に動かしているのは辻少佐らしいと気づき始める。「これほど関東軍の立場を考へて」いるのに「中央の不同意を承知の上で殊更出し抜く、その不徳義、その権謀的態度に心底から」怒った³³⁾ 稲田作戦課長は、参謀人事を所管する岡田庶務課長や陸軍省の額田補任課長へ辻の更迭を要望したが、二人とも「あれは役に立つ男ですよ」と煮えきらない。

そこで板垣陸相へ「いまの関東軍司令官は辻君です。彼がかきまわすので事件が大きくなってしまった」と直訴したが、かつて上司として辻を重用した板垣は、「そういわないでかわいがってくれよ³⁴⁾」とニヤ／＼笑うばかりだった。稲田と作戦課のほうにも、弱味がないわけではなかった。四月に関東軍が示達した「満ソ国境紛争処理要綱」に「一時的にソ領に侵入……することを得」という条項があり、送付された大本営作戦課は疑問を呈さなかったばかりでは

ない。既述したように要綱を第二十三師団長が指揮下の部隊へ説明する席に出張中の稲田ら作戦課員が居合わせ、松原らに一時越境を大本営も容認していると思わせたからである。おくれればながらこの「失策」に気づいた大本営は、二十九日の大陸命三二〇号で国境線の主張が異なる地域の「防衛は情況に依り行わざることを得」と修正し、大陸指で戦闘行動の範囲をポイル湖以東に限定した。

裁可にさいし、どこまで問題点を知らされたかは不明だが、昭和天皇は明らかに参謀本部の優柔な対応ぶりに不満だった。畑日誌には「明かに越権行為にて一の大権干犯と見ざるを得ず……当然関東軍司令官の責任なり」という天皇の発言が記録されている。植田軍司令官の更迭を要請したとみてよいが、閑院官総長は「軍司令官の処分に関しては何れ慎重に研究」と逃げてしまい、天皇は「将来もこの種のことは度々起らざる様注意せよ」と駄目押ししている。⁽³⁵⁾しかし大本営は大元帥の怒りを「柳に風」とばかり受け流し、「一時的越境」について今後の裁可は期待できないとしつつも、「万やむを得ざる」行動は可能になるよう配慮する所存だと抜け道を暗示するかなような表現の次長電を添えて関東軍へ伝えている。

傍点の部分の真意は、まもなく判明する。「大本営研究班抜粋」に、七月二日付で冒頭部の（一）が抜けた「総長上奏」という奇妙な文書が入っている。ハルハ河の越境進攻を必要とする理由を、関東軍に代って弁明するスタイルになっているが、一部を引用したい。

（二）ハルハ河左岸台地は同河右岸の我方を瞰制しあり、正面よりする我攻撃は敵砲火に暴露するため、多大の損害を招き（東支隊の失敗例を引き）……敵の側背を攻撃し特に左岸地区に在る敵の砲兵を撲滅するとともに

同河の敵橋梁を扼し退去する敵に徹底的打撃を与うるの要あり。

右の如く一時なりとも我方の認定しあるハルハ河の線を越えて行動することは……万已むを得ざるものと考察せられ、之が為に事件を拡大紛糾せしむることは無きものと認めらる。

推測になるが、七月二日は日曜日で畑日誌にも上奏の記事はないので、上奏案を下書きだけでとどめたのであるまいか。もし二日に上奏しても事後報告となつてしまい、天皇の激怒を誘うばかりと思ひ直し、頬かむりすることにしたのかもしれない。

七月二日、三日の攻勢が失敗に終つたせいもあり、関東軍は大本営作戦課にも報告を怠つたらしく井本少佐メモは「状況依然明確ならず。有利に進展しあらざるが如し」(六日)、「状況すこぶる不明」(七日)と記入し、十一日になつて、やっと「総長参内将来の見透しに就き上奏、第一部長は其の実視せる状況に就き御説明」するに至つた。天皇が知らぬ間に戦は始まり終つてしまつたのである。

多少の内わもめがあつたにせよ、統帥権者である天皇に対して、関東軍と大本営は持ちつ持たれつの共同戦線を張る姿が露呈したと言えそうだ。モンゴル人研究者のエルデニバートルは、七月三日の渡河作戦に姿を現わした橋本第一部長が混雑をきわめる軍橋に立つて一時的に砲兵を指揮した事実に注目した。そして「関東軍独走」という通説は虚構にすぎず、関東軍と参謀本部は「作戦上の〈対立〉」というより、むしろ〈合作〉の方が目立つ³⁶と指摘している。ともあれ、矢はずでに弦を離れた。しばらくは目を移して、その行先を見定めることにしたい。

貧弱な架橋能力

戦闘は過誤の連続であり、より多くのミスを犯したほうが敗れるという言い伝えは正しいが、偶然にまぎれこむ幸不運で流れが変わる場合もあり、戦史研究に興味を添えてくれる。七月一日を目途に発動された第二十三師団による攻勢作戦の変転を眺めると、勝敗は別としてその思いが去来する。

ハイライトと目される局面は二つあった。ひとつはハルハ河東岸（右岸）のソ蒙軍と安岡戦車団の攻防（七月二三日）、もうひとつは、シュテルン将軍が「ハマルダバ大会戦」と名づけた西岸（左岸）における日本軍歩兵とソ蒙軍機甲部隊との遭遇戦である。

結果的に安岡戦車団は東岸のソ蒙軍陣地を突破できずに後退し、西岸の日本軍も半日で進撃をあきらめ、一本だけの軍橋を渡って東岸へ撤退した。彼我の数的損失だけ見れば痛み分けと評す余地もあるが、作戦目的を達成できなかった点を考慮すれば、仕かけた日本軍の分が悪いといえる。

関東軍の辻参謀は事件から十年後になっても「勝負なし、引分けに終わった」と、当時と同じ負け惜しみ調だが、七月三日に架橋現場で戦況を視察した橋本参本第一部長は、「ハルハ河左岸の戦況は結局退却なり」⁽³⁸⁾（井本熊男メモ）と率直に失敗と敗北を認めていた。軍中央の公式見解と受けとってよいだろう。

大著『ノモンハン―草原の日ソ戦』の著者A・D・クックス博士は、関係者の証言や記録を広く参照して、彼らが指摘した西岸作戦の「敗因」を次のように列記する。⁽³⁹⁾

1. 敵に対する過小評価と自軍に対する自信過剰

2. 上級司令部の戦略指導のまずさ
3. 弱体な第二十三師団
4. 劣勢な火炮力
5. 脆弱な兵站（補給）
6. 劣弱な架橋能力
7. 原始的な対戦車戦闘力
8. 非効率な通信

9. 劣弱な戦車の性能と運用
私としては東岸作戦で日本陸軍にとって初体験となる戦車対戦車の戦闘が加わるので、あえて、を追加しておきたい。

こうした指摘の詳細はここでは深入りせず、作戦経過を追っていく過程に織りこんで論及したあと、ソ蒙軍と対比する形で総括的な論評を試みることにする。

表1は右岸と左岸への攻勢作戦を發動した時点における参加部隊（小松原兵团）の編組等を一覧したものである。六月十九日の当初案では園部和一郎中将（陸士16期）の指揮する第七師団と安岡正臣中将（同18期）が指揮する安岡支隊（第一戦車団の戦車第三、第四連隊）を主攻、第二十三師団を助攻とする構想だったが、前述のように植田軍司令官の意向で主攻と助攻部隊が入れ替った。

それに伴って作戦の基本構想も変化する。当初は第七師団の二個歩兵連隊を随伴する戦車団が、ハルハ河上流の

コロベンネイラ付近で渡河して、ハマルダバをめざし北上する予定にしていたのを、第二十三師団主力にも下流で渡河南進させ、ソ蒙軍主力を西岸地区で挟撃する構想へ拡大したのである。

難点は直ちに調達できる架橋材料の不足だった。師団規模の部隊を渡河させるには「少くも三本の架橋材料と三個中隊の高射砲が必要⁽⁴⁰⁾」とされていたのに、第二十三師団の工兵23連隊は教育用として熊本から携行した八〇メートル分の乙式軽渡河材料と漕渡用の折疊舟二〇隻しか持っていなかった。

乙式では戦車や重砲を渡せる強度がないので、使用兵力は歩兵と小口径砲に限られる。六月二十一日に關東軍司令部から来た辻參謀が渡河作戦を持ちかけたさい、小松原師団長が渋ったのも、劣弱な架橋能力に不安を抱いたからだろう。しかし辻が「しきりに越境攻撃を求め、師団長が独断でやれんようなら、辻が關東軍司令官の名をもって軍命令を出す⁽⁴¹⁾」と迫ったので、承服してしまう。

追って二十五日に発出された關東軍命令(関作命甲12号)には「第二十三師団長は……一時(ハルハ)河左岸に行動⁽⁴²⁾することを得」とある。傍点は辻の独断を、第二十三師団長の「独断」にすりかえるための修飾なのかもしれない。理解に苦しむのは、当初案では戦車の渡河も可能な甲式重渡河材料を持つ工兵第7連隊を戦車団に随伴させる予定にしていたのを取りやめて、代りに戦車団と同じ公守嶺にいた工兵第24連隊にさし変えたことである。

工24は六月二十一日応急派兵が下令されたときは吉林で渡河演習中で、二十三日には戦車団とともに鉄道終末点のハロンアルシヤンに到着したが、折からの雨で次の集結点であるハンダガヤへの道路は泥濘と化した。キャタピラ走行の戦車だけは何とか二日後に着いたが、燃料、弾薬、架橋材料を積んだトラックは途中で動けなくなった⁽⁴³⁾。

このままでは主攻勢の予定日に間にあわないと判断した關東軍は、ハルハ河上流の渡河計画を放棄して安岡支隊を

軍直轄から第二十三師団長の指揮下へ編入、將軍廟へ北上させ東岸地区でソ蒙軍陣地の突破攻撃に使うよう変更した。場合によっては歩兵をつれずに戦車だけで渡河しても、「河に乗り入れたらエンジンストップ立往生となることは目に見えている」と苦慮していた玉田戦車第四連隊長は「渡河をやめ、補給線をハイラル方面に変えた」のを知り、配属の「野口参謀と互いに顔を見合せてホツとした」と回想する。

小松原が頭を悩ませたのは、ハルハ渡河点の選定で、(1)ポイル湖東方の下流、(2)フイ高地南方の中流、(3)コロベンネイラ付近の上流の三案を検討したが、(1)は補給拠点(將軍廟)から遠すぎるので放棄し、(3)は前記のような事情で断念せざるをえなかった。それでも小松原はあきらめきれず、偵察隊を派遣して、「上流方面の渡河覚束なきが如し」(小松原日記、6月29日付)と判り、やむをえず(2)を選択する。

のちになって小松原は、ハンダガヤまで来ていた工24の重架橋材料を運べよかつたと後悔したらしいことは、次のような小松原日記の記事から見当がつく。

敵(は)攻勢開始に先「ダ」ち一夜に重架橋四を作る。我軍作戦に際し架橋材料の配給を受けず、工兵自隊の軽渡河材料しか而も一の掛換なき材料にて渡河し頗る際どき危険極まる作戦をなせり。安岡支隊方面の重渡河材料は降雨のたためハンダガヤより来らず爾後直に引揚げられ請求するも交付せられず 攻勢を企図する敵の準備周となる、我軍に比較にならず(8月22日付)。

小松原が気づいたように、兵員、弾薬、食料をトラックに積んだままでは渡せない貧弱な橋一本で七千余の将兵を

敵地に投入した「危険極まる作戦」は、当然の報いを受ける。渡河自体は幸運も手伝ってほぼ無抵抗で達成できたものの、渡橋に手間取ったため、進撃開始直後からソ連戦車群の反撃に会った。数時間後には「後方をただ一本の軍橋に託するのは危険」だとして撤退するはめに至ったからである。

橋が戦局全体の死命を制す状況はソ蒙軍も同様で、彼らもきわどい場面を切り抜けていた。ノモンハン戦の最終までにソ軍工兵が架設した橋は計二十二本（ジュエコーフ報告）に達するが、五月末には川又地区の一本にすぎなかった。六月に入ると三本が増設されたが、十六日の増水で二本は壊れてしまい、日本軍が渡河してきたときは二本しか残っていない⁴⁴。

西岸、東岸の両攻撃隊は、この橋の占領か破壊を目標にしていたので、そうなれば東岸のソ蒙軍は補給を断たれ立ち枯れも同然になりかねない。日本軍は七月に入って幅20mのホルステン川に旧工兵橋、新工兵橋の二本を渡したが、ハルハ本流への架橋は見果てぬ夢で終わってしまった。

戦車対ピアノ線の東岸戦

小松原中将が関東軍の矢野参謀副長、服部、辻参謀らとの協議を経て、攻勢作戦に関する攻撃命令（師作命甲一〇五号）を下達したのは六月三十日の一五〇〇である⁴⁵。十三項目の第二項で「師団は主力を以ってハルハ河を渡河し越境敵軍を捕捉殲滅」する作戦目的を示し、第三項以下で参加諸隊の任務と軍隊区分を列記している。

表1で示すように兵力の規模は通信隊、衛生隊、自動車隊などの後方部隊をどこまで含めるかで数字は分れるが、西岸に渡ったのが約七五〇〇人、東岸の安岡支隊が約六〇〇〇人、予備と後方部隊も合した地上部隊の総数は一万六

千人余と推定される。⁽⁴⁶⁾ 別に第二飛行集団の約三〇〇〇、満軍の約一七〇〇を加えると二万人を超えた。

服部参謀が「鶏を割くに牛刀を以てせんことを欲したるもの」と回想したのを、「関東軍作戦課のいわゆる牛刀主義」と呼んだ戦史叢書は「敵を戦場から離脱させないため、わが企図を一切秘匿し、従って飛行搜索も行わず、急襲によって一気に包圍殲滅しようという考えであつた」と解説する。⁽⁴⁸⁾

そのうえ、攻勢発動の直前に「ソ軍の戦意乏し」とか「ソ軍退却中」というたぐいの情報が師団司令部に届いて指揮下の部隊にも伝わった。六月三十日の前記作命の第一項には「哈爾哈河々畔に在る敵は戦意既に喪失し撃滅の好機到来せり」と、異例の情勢判断が加わっている。

関東軍がこれほど樂觀主義に流れた根拠は、必ずしも明確でない。戦力面を比較してみても、軍の作戦参謀たちは、当面のソ軍兵力を軍団砲兵によって増強された狙撃一個師団内外（狙撃約九大隊）、戦車二個旅団（一五〇〜二〇〇両）、飛行機一五〇機、自動車約一〇〇〇両のほか、外蒙騎兵二個師団と判断していた。⁽⁴⁹⁾

日本軍が投入した歩兵十二大隊（二万弱）、戦車七〇両、飛行機一八〇機、自動車四〇〇両に比較すると、ほぼ均等で「牛刀」とは言いにくい。のちに辻参謀は「蓋を取ってみた敵兵力は、一倍半乃至二倍に近いものであつた」と書いているが、実状はどうだったのか。

ジューコフ最終報告書によると歩兵は一万一千余、戦車一八六両、装甲車二六六両、飛行機三〇五機で、日本軍の兵力を歩兵二万二千と過大に見積り、兵員と砲数は日本軍の半分だが、戦車・装甲車ではソ軍が優勢だったと総括している。⁽⁵¹⁾ 局面を七月三日から四日にかけての「バインツァガン戦」に限ると、日本軍の歩兵約六千に対し、ソ軍は二千弱と少ないかわりに、戦車・装甲車は約三〇〇両に対し日本軍はゼロという非対称ぶりだった。

同時進行した東岸地区の戦闘では、歩兵と戦車のバランスは逆転する。歩兵二三〇〇、戦車八両、装甲車六二両で守備していたソ蒙軍陣地に安岡は歩兵二四〇〇、戦車六七両、装甲車一七両で攻勢をかけ、半数近い戦車を失って撃退されてしまう。⁽⁸²⁾

次は戦意の側面だが、冷静に観察すれば、むしろ逆の現象が目につく。すでに二十一日に発令した応急派兵で師団主力と歩26などの配属部隊は、ハイラル等を出発して五〜七日かけた強行軍で二〇〇kmを踏破して、二十九日までに將軍廟地区に集結を終っていた。日本軍の攻勢が近そうだと警戒したソ蒙軍は、二十日頃からハルハ東岸の各所に偵察部隊を出没させている。なかでも二十三日には装甲車を伴う歩騎兵の集団が將軍廟を襲撃して、翌日にかけて小ぜりあいを交えたのち退散している。⁽⁸³⁾

七月一日に行動を起こした左岸攻撃隊は、進路を誤まり北方に偏した歩71の西川大隊が二日朝渡河してきたソ蒙軍と河岸で交戦、七九人の死傷者を出す。そのかわり、対岸のソ蒙軍に予想渡河点を実際より十数km北方と誤断させ、主力の無血渡河が成功する一因となった。

安岡支隊が予定を変更して渡河部隊よりも半日早く川又のソ蒙軍陣地への突進を開始したことも、やはり一種の陽動効果をもたらす。戦車をふくむ日本軍の主攻正面は東岸になるかもしれないと疑ったジュューコフは、タムスク周辺に待機させていた予備部隊へとりあえずハルハ河畔への移動を指示した。

そこへ予想より早い日本軍の渡河に不意を打たれたジュューコフは、河畔から五〇kmまで近づいていた機甲集団に進路を変え徹夜の行軍体形のまま迎撃せよと命じた。当初の構想どおり、日本軍がハマルダバを南北から挟撃していたら戦局がどう展開したかは興味深い論点であろう。

ともあれ同時進行した二つの戦場のうち、まずは西岸における安岡支隊の戦闘経過を追ってみよう。支隊の任務が確定したのは、七月二日一七〇〇に発令された師作命甲一〇九号である。それまでに到着したのは戦車団だけだったので戦歩砲の協同攻撃が可能なように、歩64と砲13の森川大隊を配属して、「三日払暁を期し攻撃前進を開始し……川又に向い突進し敵をハルハ右岸に殲滅すべし」と命じた。工24には挺進隊を編成して、川又軍橋へ進入して占領するか爆破する任務が与えられた。

だが作戦企図は挫折した。要因はいくつかある。第一は敵が退却中という「虚報」に影響されてか、安岡支隊長は発進時間を半日早めて七月二日夜にくりあげ、しかも歩砲を置き去りにして先例のない戦車団の単独夜襲を執行する。幸運にも折からの大雷雨にまぎれ夜十一時頃、敵縦深陣地の第一線を奇襲突破したが、歩兵の直協を欠いたため「暴れまわった」だけで、七台の戦車を失い隊形整理のため一時後退する。

第二は、西岸台上のソ連軍重砲が五〇メートルの比高を利用して対岸を南下する安岡支隊に正確な猛射を浴びせたことである。ところが日本軍は反撃できる重砲を持ちあわせず、歩64、砲13、工24の兵士たちは壕に伏せたまま釘づけにされてしまう。二日おかれて追及した梶川大隊に至っては、支隊本部と最後まで連絡がとれぬまま右往左往しただけに終る。

戦車団の突進は翌日に再開されたが、待ち構えていたソ軍の戦車・装甲車・対戦車砲のチームに迎撃された。なおも突破しようとした戦車第3連隊の戦車はキャタピラを鉄条網のピアノ線にからめ取られ、動けなくなったところを狙い撃ちされて吉丸連隊長車をふくむ十数両が炎上した。それは「ピアノ線の悪夢」として伝説化する。ソ連側から見たこの戦闘の情景を、少し長くなるがコロミーエツ著から引用したい。

(七月二日の正午頃)、ハルハ河の東岸には第9装甲車旅団の装甲車のほかに第11戦車旅団第2大隊所属のルキ
ン大尉が率いるBT—5戦車8両が展開していた(戦車は3日1000ごろ東岸に渡河)。戦車第3連隊との2
時間の戦闘で戦車5両を破壊し、ソ軍は3両が撃破された(中略)

約40両の日本戦車は、第9装甲車旅団の防陣地に進路をとった。これほどの戦車の大群を目にした装甲車
中隊は撤退を始めた。そこへ到着した旅団の司令官と政治委員はこの中隊を陣地に引き戻し、掩体から砲塔を突
出させ位置につかせた(中略)激しい砲撃戦が始まり、それは二時間以上も続いた。敵は9両の戦車を遺棄して
後退した。⁽⁵⁴⁾

このあと東側から迂回してソ軍右翼の第一四九狙撃連隊に攻撃をかけた軽戦車が主体の戦車第4連隊と、夕方の迎
撃戦がつづくが、玉田連隊長が慎重に進退したため、大きな被害は出さずに後退している。

この戦闘は、日本陸軍が初めて経験した戦車対戦車の対決であった。第二次大戦では、北アフリカ戦線で数百台、
独ソ戦線では数千台規模の大戦車戦さえ出現するが、数十両ばかりの小規模とはいえ、世界戦史でも初例だったかも
しれない。得られた戦訓は少なくなかった。

玉田連隊長がイチ砲手から「隊長殿。私の射つ弾丸はたしかに敵の戦車に命中するのですが跳ねかえりませ⁽⁵⁵⁾」と聞
いたように、八九式中戦車の57ミリ砲は短身低初速のためBT戦車の装甲を貫通できず、有効射距離も八九式が七
八〇〇mに対しBTは一五〇〇〜二〇〇〇mもあった。その半面、高初速の徹甲弾を撃つソ軍の戦車、装甲車の45ミ
リと35ミリ砲は貫徹力にすぐれ、日本戦車の薄い装甲を簡単に撃ち抜いた。

表2 ハルハ渡河の経過

	漕渡開始	渡橋開始	渡橋後退
歩兵第71連隊	7月3日 0230～0400	7月3日	5日0115～0300
歩兵第72連隊	0315～0430		4日0430～
砲13のⅢ大隊	——	0900～0930	3日2130～4日0500
23師団司令部	——	1000	3日夜
歩26のⅠ大隊	——	0800～1100	5日0300～0500
歩26のⅡⅢ大隊	——	1030～1230	5日0300～0500
搜索隊第Ⅰ中隊	——	1700～	5日0400

- (注1) 増水したハルハ河の幅は80m、水深は2m、流速は毎秒2.5m
(平時は0.8m) (斎藤勇手記)
- (注2) 軍橋の長さは80m、幅は2.5m。
- (注3) 漕渡の開始は7月3日0時、架橋作業の開始は0130を予定していたが、実際の漕渡開始は0230に、架橋開始は0300(終了は0640)とおくれた。
- (注4) 軍橋の爆破は7月5日の0530。
- (注5) 7月の日の出は0400～0430、日没は1930頃

火炎びん対戦車の西岸戦

次にハルハ西岸(左岸)のバインツアガン(白銀査干)台地での戦闘へ目を転じよう。

歩兵団長小林恒一少将が指揮する左岸攻撃隊(主力は歩71、72)は工23が輸送してきた二〇隻の折疊鉄舟(15人乗り)による漕渡を七月三日〇時、架橋作業を〇二三〇に開始する予定にしていたが、暗夜の移動で道を迷うなどの手違いが生じ、二時間以上おくれってしまった。

手違いはそれだけではない。架橋材料の強度が足りず、流速が早かったこともあって、トラックは兵員や砲、弾薬などの重量物はいったん卸して一台ずつ渡したあと積み替えるので大混雑となり、渡河終了が予定より五時間以上もおくれた。⁽⁵⁷⁾

とくに先鋒として全員を車載で歩兵団の最外側を迂回進撃する予定の歩26は、渡橋直前にトラックを司令部に取られ、他部隊と同様の徒歩に変更されて、ようやく全

兵力が左岸に渡り終ったのは一二三〇になっていた。それでも渡河点の周辺にソ蒙軍は兵力を配置していなかったため、渡河作業もハラ台とコマツ台をめざし南下を始めた歩兵団の初動はほとんど妨害を受けていない。

ソ蒙軍が結果的に虚をつかれた形になったのは、それなりの理由があった。ジュークフは近く日本軍が攻勢に出ようとしているのを察し七月一日夜、タムスクからウンドルハンにかけて集結していた第十一戦車旅団（ヤコフレフ少将）、第七、第八装甲旅団、狙撃第二四連隊（フェディニンスキー少佐）などの予備隊に、ハルハ河岸へ進出するよう命じた。

七月二日夜、安岡戦車団が東岸のソ蒙軍陣地への攻撃を開始したと知るや、ジュークフはそれを日本軍の主攻正面かと判断して、側面と背後から増援しようと、予備隊の前進を急がせた。とりあえず小林歩兵団に立ち向かえる兵力は一千人余と一群の重砲にすぎなかったのだが、予備隊の急進はかろうじて間に合った。

最初に日本軍の渡河に気づいたのは、ベイスン廟（廢墟）付近で東岸から戻りかけていたモンゴル騎兵第6師団で、〇五〇五頃に反転して攻撃をかけたが簡単に追い払われ、しかもその情報がハマルダバの前線司令部に前進したばかりのジュークフに届いたのは〇九〇〇頃とおくれたようだ。もし小林歩兵団と歩26の前進開始が手違いでおくれなければ、川又軍橋を占領してハマルダバまで突進できたかもしれない。

しかしソ蒙軍にとって幸運だったのは、東岸へ増強するつもりでの強力な予備隊がすぐ近くまで到着していたことである。日本軍が対戦車防御陣地を構築する前に反撃すべきだと判断したジュークフの心境を、ノヴィコフは次のように記している。

表3 バインツァガン戦の戦闘経過（7月3日）

○日本軍 ●ソ蒙軍

時刻	事項
0000	●全予備隊を安岡支隊の側面攻撃へ向ける指令
0230	○歩71 ハルハ河の漕渡開始（辻参謀同行）
0500	●モンゴル第6師団の騎兵・装甲車、日本軍を攻撃後退却
0530	○小林歩兵団の南下進撃開始
0640	○架橋終了
0700	●第8装甲旅は歩72を攻撃、9両のうち4両失
0800	○歩26 渡橋開始
0830	●第11戦車旅の8両、歩71を攻撃、8両を全損
0915	●ジューコフ、総反撃を決意
1000	○歩26、敵戦車と交戦 小松原・矢野左岸へ
1100	●ソ蒙軍の第一次総反撃発動 ○橋本少将、軍橋を視察
1130	●第11戦車旅I、II大隊による攻撃、94両のうち51失 ○草場中隊、師団長の危急を救う
1200	●狙撃24連隊、歩26を攻撃 ○服部参謀、満航片桐飛行士の小型機で戦場着
1300	●東岸のソ砲兵、西岸の日本軍を砲撃開始
1500	●第7装甲旅、歩72を攻撃、50両のうち36失 ○関東軍参謀等、小松原と撤退方針を協議
1600	○左岸→右岸撤退の第23師団命令（作命甲111）
1900	●ソ蒙軍、三方向より第二次総反撃

政経研究 第四十九卷第一号（二〇一二年六月）

一〇八（二〇八）

ジューコフは、歩兵と砲兵の到着を待つか、戦車と装甲車だけで直ちに反撃すべきか、判断を迫られた。ソ連野外教令（一八八条）は、砲兵の支援を受けられない戦車の単独攻撃の実施は許さないと規定していたのだが、彼は迷ったのちあえて後者に踏み切った。実際にはその戦車・装甲車も、間に合った部隊ごとの逐次投入になった。それでも手元にあった重砲一個大隊が砲撃に加わったし、東岸にいた砲兵へハルハ河越しで日本軍を砲撃するよう指令を出し、航空隊にも全力出動を命じた。⁽⁸⁸⁾

「戦車と歩兵の白兵戦」（クックス）は断続しつづ〇七〇〇から一六〇〇頃までつづく（表3参照）。現場に近いスンプル・オボの博物館には、大草原を所狭しと駆けまわるソ蒙軍戦車、装甲車の大群と、火炎び

んで立ち向う日本兵の姿を描いた壁画が展示されている。モンゴルにとっては史上唯一ともいえる戦勝のシーンであり、ジューコフにとっても第二次大戦きつての英雄へ躍進する道を拓いた意義深い戦闘だった。

日本軍も炎上する戦車から数十条の黒煙が立ち昇る写真を公開して、兵士たちの勇戦ぶりを宣伝、国民の士気高揚をはかった。それ以来、火炎びん対戦車の構図がノモンハン戦のイメージとして定着するようになる。

左岸攻撃隊が用いた対戦車兵器は、サイダーびんにガソリンをつめた間に合わせの火炎びんだけではない。他に37ミリ速射砲、75ミリ野砲、対戦車地雷も使われ、戦果をあげた。代表的な体験談（要旨）をひとつずつ挙げてみよう。
火炎びん

ハルハ河を渡っていく時には、できるだけ軽装でというわけで、志願者から成る20人の肉薄攻撃班は手榴弾と二、三本の火炎びんを持たされた。大隊の前面に出たとき、六十台ぐらいの戦車は車間5m、横の間隔5mぐらいで散開して迫る。二名一組で伏していると機銃弾の雨、三両目の戦車が目前を通り過ぎようとするとき、点火して逆手に持った火炎びんを履帯に打ちつけた。戦車は火の車となつて、三〇メートル余り走つて止まった⁽⁸⁹⁾（歩26安達大隊の四宮栄上等兵）。

対戦車地雷

敵戦車は二、三台ずつ一組になつて周囲をまわりながら撃つてくる。まるでネコがネズミを捕えるときのようだ。しかし速射砲はまだ来ない。

肉薄攻撃班の一兵士が飛び出した。戦車の死角を利用して弾丸の雨の中の突進である。「あつ危ない」と思った時、兵士は地雷をつけた竹ザオを戦車に向かって突き出した。バーンツと爆破音、同時に戦車はピタツと停止

した。どつと歓声があがる。勇敢な兵士は戦車に飛び乗って、天蓋をこじ開け手榴弾を投げこんでいる(歩72の野村春好中尉)。

速射砲

トラック一台に速射砲一門を乗せて、動かないように土のうで固定。砲を車からおろすひまもなく、車上から撃ちまくった。戦車四十台を焼いた。速射砲は移動物を撃つようできてから直接照準で一〇〇〇m以内なら確実に命中する。近くへ引きつけて撃つと徹甲弾が戦車を貫通してから破裂するので。パツと燃える。

しかし砲一門当り六、七十発しか持つてなく二分間連射すれば、もうおしまい(歩71配属の速射砲2中隊の八川万吉軍曹)。速射砲分隊は距離二〇〇mで撃ち次々に命中、十分間に7両を破壊した(歩71の岡本千蔵少尉)。

75ミリ野砲

巧みに地形を利用し機をうかがっていた敵戦車十数両が矢のように右稜線の斜面を下って師団司令部をめがけ殺到。見れば師団長の乗用車と敵戦車との距離はわずか三十メートル!!である。

撃つていいのか?悪いのか?ためらう間に、敵戦車群はほとんど直角方向にフルスピードで突っ込んで行く。地の利乗用車に与せず、ついにその差十五メートル!目測七百メートル。「連続各個に撃てッ」と思わず叫んだ。

見よ!肉薄していた最先頭の敵戦車はすさまじい火炎、全員叫ぶ万歳の声!残りは我が放列に肉薄してきたが、五百メートルに引きつけ、一台もあまさず全十四両を破壊しつくした。もつとも近いものは三十メートル(砲13中隊長の草葉栄『ノロ高地』より)。

こうした華々しい戦果で参加兵士たちの士気は高まった。歩71の戦闘詳報は「裾野の巻狩の如し」とか「時ならぬ八幡工場地帯を現出」と余裕たっぷりだが、犠牲をかえりみないソ蒙軍戦車隊の挑戦も無駄ではなかった。防勢に追われた左岸攻撃隊の前進を、上陸点から4 km前後で食い止めたからである。

滞在一〇時間で撤退へ

それでは日本軍が使った対戦車兵器のうち、どれが効果的だったのか。

コロミーエツはノモンハン戦全体を通じて撃破されたソ軍戦車・装甲車への加害兵器を種別に分析して、

- | | |
|--------------|----------|
| 1. 対戦車砲（速射砲） | 75 ～ 80% |
| 2. 野砲 | 15 ～ 20% |
| 3. 火炎びん | 5 ～ 10% |
| 4. 手榴弾・地雷 | 2 ～ 3% |
| 5. 空襲 | 2 ～ 3% |

という比率を示し、「日本の37ミリ速射砲は、いかなるわが戦車の装甲も無理なく撃破貫通する」と優秀性を認めた。ジューコフ最終報告書も、七月三日の戦闘で全焼した二〇両の戦車（全損害は七七両）を検査して「対戦車砲による射撃は最も効果的で、それに次ぐのは75ミリ野砲で、火炎びんは二両だけ」と結論づけた。どうやら火炎びんは武勇伝の一種にとどまると言えそうだ。

日本側もこの実戦テストで速射砲の威力を認識したようで、関東軍は七月二十二日に参謀長名で、第二十三師団は

第八国境守備隊より速射砲30門、第一、第七師団が装備する速射砲を増加配属したので「辛うじて対機甲戦を遂行するを得たり」と報告している。

もつとも、火炎びんが効果をあげたのは一〇〇km以上の連続走行と晴天下の暑熱で敵戦車の車体が過熱され、ガソリン燃料に引火したせいでもあった。それを知ったソ連軍は鉄製のネットをかぶせ、ガソリンからディーゼル機関に切り換えたため、ノモンハン戦の後半では火炎びんは威力を失ってしまう。

もうひとつの戦訓として日ソ双方が気づいたのは、歩兵(および砲兵)を随伴しない戦車の脆弱性であったろう。それは何よりも数字によって裏づけられた。東岸の日本戦車隊は参加車の五割近く、西岸のソ連戦車隊は六割を喪失したからだが、対処策は分れた。

ソ軍は必ず歩砲兵の援護をつけ、日本軍は「技術的にも練度でも未熟で現代戦の遂行には不十分⁽⁴⁾」とジューコフに酷評された戦車の戦場投入をあきらめ、後半戦では全満の速射砲を集めて対抗することにした。

とかく見落とされがちだが、バインツァガン戦は舞台廻しが大仕掛で華々しいわりに、双方とも戦死者が三百人前後にすぎない人命節約型の戦闘だった。大草原での不期遭遇戦で、進退自由の機動戦に終始したせいもあらうが、最大の理由は日本軍が早々に西岸への撤退を決意したことにある。この日、関東軍司令官から作戦指導の権限を付与されて戦場に進出した矢野参謀副長は服部、辻の両参謀を帯同し、師団長と行動を共にしつつ戦況の推移を見守っていた。午後になってもソ軍戦車の攻撃は止まず、撃退はしたものの「恐らく敵は今夜更に新鋭を増加して、明朝から反撃に転ずるであろう……ハルハ河西岸の戦線も、漸く膠着の色が見える」と判断した参謀たちは協議して、次のような理由で右岸への転進を小松原へ勧告した。

表4 ハルハ両岸戦のソ蒙側統計

(1939年7月2日～5日)

ハルハ河畔の攻防(秦)

	兵力 (歩騎兵)	兵力 (その他)	122ミリ 砲以上	75ミリ砲	対 車 砲	戦 車	装甲車	出 所
1. 西岸 ソ軍a	1,562	4,414	38		6	182	154	ジューコフ報告書
ソ軍b			20	14				77/133
モ軍	1,956						8/18	同上
2. 東岸 ソ軍	} 3,200		8	20		3/8	?/62	コロミーエツ
モ軍								
3. 合計 (1+2)	11,184	1,000	28	58	23	186	266	ジューコフ報告書
ソ軍の損害 (7月3日～ 12日)	2,431(戦死)					125	67	鎌倉英也 (ロシア・アーカイブ)

- 注(1) 1はa、bの二説を掲げた。
 (2) 戦車、装甲車の右段は参加数、左段は損失。
 (3) 3合計(1+2)は、モンゴル東部の全兵力と思われる。

1. わが補給は唯一本の橋に依拠せねばならないが明朝以後、敵の集中攻撃を受けて破壊される危険がある。しかも代替の渡河材料は皆無である。

2. 弾薬も残り少なく、兵士たちの食糧、水は尽きかけ、疲労も大きい。

3. 進退の責任は関東軍が負う。

師団側も「内心この意見を希望していた」らしく、小松原も同意して一六〇〇に「師団はすみやかに左岸を撤し、爾後右岸のソ蒙軍を撃滅する」との師団命令が発令された。

この決定に対する異論がないわけではなかった。最前線にいて敵砲兵陣地の撃破を準備中の小林歩兵団長は「未だ所期の目的を達せずして甚だ遺憾に堪えず。尚一層徹底するを有利とせしならん」との所見を日記に記し、戦史叢書の筆者でさえ「間もなく迫りくる夜間こそは日本軍歩兵活動の独壇場ではなかったか」と惜しんでいる。だが全体状況を冷静に眺めれば、撤退

の決心は妥当だったと見るべきだろう。

ジューコフは「歩兵の不足は敵残存将兵に河向うに退去するチャンスを与えた」と残念がるが、それでも左岸攻撃隊全員の撤退を見届けて五日朝、斎藤工兵23連隊長が爆破を命じるまで、ソ蒙軍は戦車、飛行機、砲撃によって軍橋を占拠するか破壊して退路を断とうと食いさがった。渡橋点援護の歩71や歩26の健闘によって何とか撃退したが、三日朝から五日朝まで軍橋が無事だったのは、奇蹟に近いと言つてよい。

日本軍当局は日本軍がハルハを越えたのも、西岸から退却した事実も公表しなかった。事情を察していたマスコミも報道を自粛し、「約三百台の戦車を遺棄。今や瀕死の外蒙ソ軍へ空陸、総攻撃を展開」(大阪朝日新聞、七月八日付)とか「越境外蒙ソ軍遂に潰滅す」(同九日付)のような戦勝記事を送りつづけている。

そうなると関東軍はますます引っこみがつかなくなったのだろう。何とか東岸の係争地域だけでも取り返そうと、人命浪費型の陣地攻防戦を重ねるようになる。

注

- (1) アメリカ合衆国戦略爆撃調査団『日本戦争経済の崩壊』(日本評論社、一九五〇)を参照。
- (2) 前掲みすず版「関東軍機密作戦日誌」(みすず書房版)八三ページ。以後はみすず版のページを記す。
- (3) 同、一四二ページ
- (4) 前掲辻『ノモンハン』、一三五ページ
- (5) 関東軍参謀長↓参謀次長(関参一電第二五八号(関東軍機密作戦日誌))
- (6) 全文は大本営陸軍部研究班「関東軍に関する機密作戦日誌抜粋」(防衛研究所蔵)に記載されている。この文書の性格は

やや明確を欠くが、昭和14年秋に始まった戦訓研究委員会のため研究班が、参謀本部ロシア課を中心に対ソ情報と上奏関係文書を収集したものの一部と推定される。今後は「大本営研究班抜粋」として引用したい。

- (7) 前掲『関東軍機密作戦日誌』四七六ページ
- (8) 前掲『関東軍機密作戦日誌』七五ページ
- (9) 「畑俊六日誌」(『続現代史資料(4)』みすず書房、一九八三)、六月二十四日の項。以後は「畑日誌」と略称する。
- (10) 前掲辻政信『ノモンハン』一一九ページ
- (11) 前掲「大本営研究班抜粋」六月二十九日の項
- (12) 『昭和軍事秘話』の今岡豊稿(同台経済懇話会、一九八九)一一五ページ
- (13) 前掲「関東軍機密作戦日誌」七四ページ
- (14) 前掲コロミーエツ四五ページ
- (15) 前掲『ジューコフ元帥回想録』一一九ページ、中山隆志「ノモンハン事件」(『近代日本戦争史』第三編、同台経済懇話会、一九九五)一七七ページ
- (16) 前掲ジューコフ最終報告書、前掲ネデイアルコフ『ノモンハン航空全史』四九―五二ページ
- (17) 前掲『関東軍(1)』四六九ページ
- (18) 前掲辻『ノモンハン』九八ページ
- (19) 前掲『昭和史の天皇(26)』四一―四三ページ
- (20) 参謀次長に提出した寺田雅雄「ノモンハン事件に関する所見」(昭和14年10月13日)
- (21) 『昭和史の天皇26』の寺田回想(六一ページ)
- (22) 前掲辻、九九ページ
- (23) 全文は前掲「関東軍機密作戦日誌」一一二―一三ページに収載。未成案に終わったためか、「昭和十四年六月 日調製」となっている。

- (24) 前掲辻、一〇二ページ。
- (25) 『昭和史の天皇26』の三好康之回想（六二ページ）。
- (26) 前掲『関東軍(1)』四七三ページ。関作命一五三〇号の発令から一時間半後の六月十九日深夜に、その要点を参謀総長へ発電し二〇分後に受電しているが、「敵航空根拠地の攻撃実施」と「写真偵察」の部分は省略している。
- (27) 目録は主として前掲「関東軍機密作戦日誌」、「大本営研究班抜粹」、「関東軍(1)」に準拠した。
- (28) 前掲辻、一〇九ページ
- (29) 前掲「関東軍機密作戦日誌」一一五ページ
- (30) 前掲ネディアアルコフ、六八ページ
- (31) 前掲クックス『ノモンハン』上、一三四ページ
- (32) 山之口洋『瑠璃の翼』（文藝春秋、二〇〇四）二二四―二五ページ
- (33) 『別冊知性』秘められた昭和史』（一九五六）の稲田正純論稿
- (34) 前掲『昭和史の天皇26』の稲田談（二二七―三〇ページ）
- (35) 前掲「畑日誌」二二六ページ
- (36) ミヤンガド・エルデニバートル「ノモンハン戦史における『関東軍独走』説への疑問」『日本モンゴル学会紀要』27号（一九九六）五ページ
- (37) 前掲辻、一五六ページ
- (38) 前掲クックス上、一七二ページ。橋本へのインタビューから。
- (39) 同右、二〇〇―三〇三ページ
- (40) 扇広（第三師団参謀）『私評ノモンハン』（芙蓉書房、一九八六）一二四ページ。扇は「関東軍は幾組かの渡河材料を持つてはいたが、そのとき、中国戦線に使用されて手持は皆無と記すが、前掲の芦川春雄証言では「当時満州には二組の渡河材料しかなく」と回想していて、確実な情報がない。

東満や北満の師団（チチハルの第七師団をふくむ）の多くは甲式重架橋材料を保有していたが、関東軍としての予備は払底していたと思われる。

- (41) 沢田茂『参謀次長沢田茂回想録』（芙蓉書房、一九八二）二四ページ、小松原の沢田への談話。
- (42) 浅利義成編『工兵第24聯隊』（非売品、一九八二）三七―三八ページ
- (43) 玉田美郎『ノモンハンの真相』（原書房、一九八二）六六ページ
- (44) 前掲コロミーエツ、四六ページ
- (45) 作命甲一〇五と一〇九号の全文は防研所蔵の歩兵第二十六連隊の「戦闘詳報」第壹号（昭和14年7月3日～4日）に収録されている。
- (46) 西岸への渡河兵力は、戦闘詳報の一部が残っていないこともあり推定にならざるをえないが、一万人（小沼治夫）、八千人弱（クックス）、六千人（小田洋太郎）などの諸説に分かれている。
- (47) 服部卓四郎回想（一九六〇年、戦史部蔵）
- (48) 前掲『関東軍(1)』、四九七ページ
- (49) 同右、四七五ページ
- (50) 前掲辻、一〇五ページ
- (51) 前掲「ジューコフ最終報告書」六二九ページ
- (52) 前掲コロミーエツ、四八ページ
- (53) コロミーエツによると、ソ軍は装甲車八両を撃破（うち四両は遺棄）され、死傷者45人を出した。日本軍の死傷は20人。
- (54) 前掲コロミーエツ、八二ページ
- (55) 前掲玉田、一一四ページ
- (56) 半藤一利『ノモンハンの夏』（文春文庫、二〇〇二）一三三―一三三ページ
- (57) 架橋と渡河の詳細は『工兵第二十三連隊記録（総括篇）』（工二十三会、一九七九）、斉藤勇「工兵第二十三連隊ハルハ河

渡河資料」（一九六六、防衛研究所蔵）を参照。

- (58) 「ソ連側資料からみたノモンハン事件」〔防衛研究所資料78RO-8H〕（一九七八）に引用されたM・B・ノヴィコフ「ハルハ河における勝利」（一九七二）
- (59) 前掲『昭和史の天皇27』八六一―八九ページ
- (60) 前掲『昭和史の天皇27』五一―五三ページ
- (61) 同右、五六―五七ページ、前掲扇、一二七ページ
- (62) 前掲コロミーエツ、一三〇―三二ページ
- (63) 前掲ジュニコフ最終報告書、六四八ページ
- (64) 同右、六五〇ページ
- (65) 前掲辻、一四三―四四ページ
- (66) 前掲『関東軍(1)』五一―八ページ
- (67) 前掲ジュニコフ、六三〇ページ